

Photo : Murayama Shinori



鼓膜の伝える声を拾う、異色のヘッドセット
[EM-MODE]

メーカー (株)マイクロエムズ
URL www.micro-ms.com

人がしゃべっているときには口からだけでなく、耳からもわずかに音がする。「EM-MODE」はそこに注目して開発された「耳内マイク」搭載のヘッドセットだ。単なるヘッドホンの外見だが、片耳側がイヤホン、もう一方がマイクとして機能する。これを携帯電話やPHSのヘッドセットに接続すれば、ハンズフリーで通話ができるというわけだ。感度もなかなか良好で、インカムタイプのマイクと音質に差はなく、むしろ外界の雑音の影響が低減されるようにすら思える。「声は口から拾う」、そんな先入観にとらわれない発想が生んだプロダクトだ。(クワクポリョウタ / デバイスアーチスト)



トヨタとソニー、日本のトップ企業が世に問うコンセプトとは
[pod]

メーカー トヨタ自動車(株)
URL www.toyota.co.jp

「一人勝ちのときに何をやるかで企業の真の実力、品性がわかる」と言われる。あのパブルにも踊らなかつた世界の優良企業トヨタが発表したのが、このコンセプトカー、表情のあるクルマ『Pod』だ。そのテーマは「人とクルマの楽しい関係」。ドライバーやパッセンジャーのためのデザイン、クルマとともに成長していくインテリジェント機能など特徴は多い。だが最大の注目点は、クルマのエクステリアに表情を与え、通行時に積極的に歩行者や他のクルマとコミュニケーションを行おうという試み。悪化する一方の交通事情、ますますギスギスしていく人間関係を改善しようという「サンキューハザード」というローカルルールを生み出した礼儀の国ならではの発想か。政治や文化が機能する欧米では考えられない日本ならではの、産業界から心優しい「気遣い」なのかもしれない。

(今泉 洋 / 武蔵野美術大学デザイン情報学科教授)



質より量で勝負する、
探偵さんチックなミニデバイス！
[IC-DP200]

メーカー アイワ(株)
URL www.aiwa.co.jp

電子機器も目的によっては質より量がモノをいうことがある。音声のみならば最大260分の録音ができる『Eye Recorder』は、ごらんのような31万画素CMOSデジタルカメラも搭載し、画像のみならば200枚が撮影できる。普通のデジカメのような液晶ディスプレイは付いておらず、同梱のソフトを使い、パソコンに接続して音声と画像を一括管理する。したがってカメラ部も本格的な撮影用にとりよりは、出先でとにかく撮りまくったあとで要るものだけ取り出す、という使い方がこの場合正しそである。

(クワクボリョウタ)

前世紀のオヤジの夢から一歩抜け出たLinux搭載“腕コン”

[WatchPad 1.5]

メーカー シチズン時計、IBM(写真はシチズン時計モデル)

URL www.citizen.co.jp

コンピュータという、モニターとキーボード、ついでにマウスを思いうかべるのが一般常識で、「それがなんと時計の中に入っちゃうんですよ」と言われてびっくりしてしまうのが、20世紀のオヤジのセンス。これまでこの路線で多くのおもちゃ的“腕コン”が話題になってきた。しかし、ちゃんと考えればCPU本体が時計の中に入れても全然不思議はない。問題はどうやってユーザーや外部との間で情報を送受し、システムとしての機能を発揮するかである。『WatchPad』は一般的なI/Oデバイスに加え、液晶タッチパネルや指紋・加速度センサー、パイプレーターなどの装置を搭載、さらに赤外線やBluetoothなどを用いて周辺と多様なコミュニケーションを可能にしている。ユビキタスな機器環境をセットで考えれば、もっとも進んだ“腕コン”に違いない。(今泉 洋)



PRO'S Products

JANUARY



我が道をいくプロ御用達堅実ディスプレイ
重箱タイプの従兄弟にも注目
[LCM-T041AS]

メーカー ロジテック(株)

URL www.logitec.co.jp

液晶ディスプレイといえば、ちょっと前なら高値の花、今や低価格化・大型化・高精細度路線を突き進む「そんなものあって当然だろ？」的プロダクトである。だが「意外や」なんでこんなものがなかったわけ？」と言いたくなるのがこれ。300gという軽量級ながら、解像度640×480、ミニD-Sub15ピンのVGAコネクタを装備して、保守、検査のための携帯用やサーバーの監視ディスプレイとしてはびったり。地味だが役に立つところではしっかり役立つ、その方面のヒトに重宝な存在である。さらにこのバリエーションに、5インチペイにスロットインできるタイプのものもあり、そちらはいかにもヲタク美学の重箱的展開なのだがそれはまた別の話である。
(今泉 洋)



“癒し”マーケットにイヌ・ネコの戦い
[ネコロ] (左) [AIBO ERS-220] (右)

メーカー オムロン(株) (ネコロ) ソニーマーケティング(株) (AIBO)

URL www.necoro.com / www.aibo.com

『ネコロ』の登場で、日本の生んだハイテク商品、「育て系」あるいは「ペットロボット」というカテゴリーにも新種が加わるようになった。先行するソニーの『アイボ』シリーズとは、犬系対猫系、メタル対フェイクファーという対比が一目瞭然。飼いに慣らすのがおもしろいのか、それともままにならない関係を楽しむのか……。どちらかという行動型の『アイボ』に対して、『ネコロ』は歩行はできない代わりに「触覚的コミュニケーション」「安らぎを与えてくれる精神的価値」を強調しているところがおもしろい。まだまだどちらも中途半端なのはまちがいないが、育て系ペットは記憶を持つモノたちと自分の時間をどう共有していくかという踏み絵的存在。おもしろいマーケットが出現したものである。
(今泉 洋)



スマートな常時携帯型ソーラーパワー
[violetta solargear]

メーカー (株)太陽工房
URL www.violetta.com

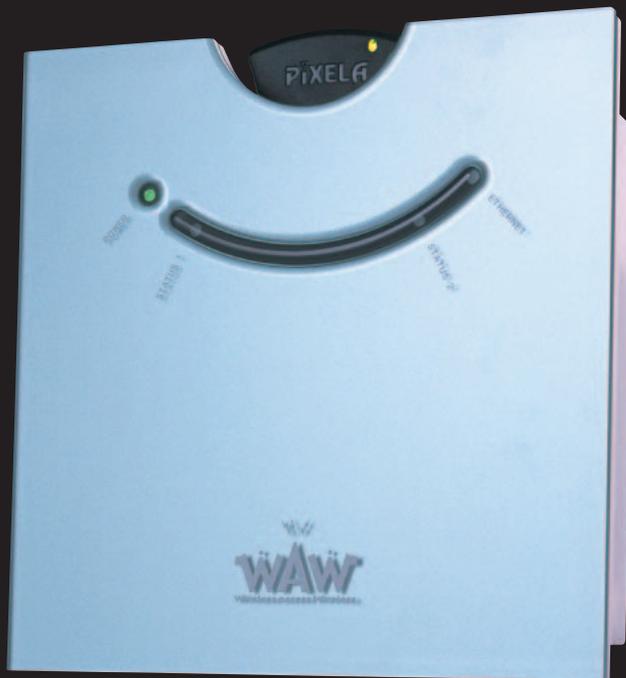
ソーラー発電を利用したバッテリーチャージャー。単3または単4形の充電電池2本が充電できるほか、携帯電話の充電や、DC3V機器への電源供給も可能だ。2台つなげば急速充電もOK。以前からもこの手のソーラー製品はあるにはあったが、シロウトが手を出すようなこねたモデルには意外とお目にかかれなかった。その点、このバイオレッタは垢抜けたデザインで、LEDインジケーターが発電状況と充電状況を示すなど、つくりもしっかりしている。常に持ち歩き、太陽エネルギーから電力を取り出すこと自体が楽しめるという一品だ。
(クワクボリョウタ)



プリペイドの究極型が生んだ、
携帯電話のミニマリズム
[Telespree Phone]

メーカー Telespree Communications Inc.
URL www.telespree.com

米国で使われているこの端末は、2つの点でケータイのユーザビリティをひるげている。1つは操作の簡単さ。インターフェイスはなんとボタン1つ。これを押して電話番号を告げると、音声で認識してダイヤルする。2つ目は契約や課金のシンプルさ。通話するにはプリペイドバック「AirClip」を購入する。これには通話時間の権利と端末を特定するためのIDのほかに電池までが内蔵されている。ユーザーは「AirClip」を買い足すだけで携帯を使い続けられるというわけだ。これくらいベーシックなデザインのケータイが日本にも1台くらいあってよいと思うのだが。 (クワクポリョウタ)



フツの家こそ欲しい、無線LANの存在感
[PIX-WAW/AP1]

メーカー (株)ピクセラ
URL www.pixela.co.jp

ケーブルのわずらわしさから開放してくれる無線LANは、一般家庭にこそ最適なシステムだ。そのなかで異彩を放つのが、なにやら壁掛けや写真立ての感覚に近い「PIX-WAW/AP1」。有線のルーターは床下だとかデスクの裏あたりで人知れず点滅を繰り返す地味な存在だが、人目に触れることが多い性質上、無線LANのルーターはこれくらいの華々しさはあって然るべきだ。どの部屋に置いてもとりあえず違和感を感じさせない、どこことなく白物に近い存在感を放っている。 (クワクポリョウタ)



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp